



# かせかけ

編集 沖縄県立看護大学  
広報・情報委員会  
発行 平成15年6月1日



中庭から望む附属図書館

## 目次

- |                                                              |                               |
|--------------------------------------------------------------|-------------------------------|
| ● Dr. Barbara Molina Kooker's<br>Commencement Speech ..... 2 | ● 大学行事<br>・第1回卒業式の報告 ..... 11 |
| ● 看護のリーダーシップと大学教育 ..... 4                                    | ・卒業論文発表会 ..... 12             |
| ● シリーズ教育・研究分野紹介 ..... 6                                      | ・退官記念講演会に寄せて ..... 13         |
| ● 教員紹介(よこがお)<br>D.Craig Willcox ..... 9                      | ● 学生の活動 ..... 15              |
| ● 「平成14年度連続公開講座について」 ..... 10                                | ・後輩へのメッセージ                    |
|                                                              | ・サークル紹介(手話サークル)               |
|                                                              | ● 教職員の動き ..... 16             |





### Dr. Barbara Molina Kooker's Commencement Speech

Governor Inamine, President Ueda, Dr. Higa, faculty, honored guests in the audience, and distinguished graduates.

I am pleased to greet you today on this solemn occasion marking the recognition of your passage into professional nursing.

In recognition of the cooperative agreement that we have between our educational institutions, I bring greetings and warm aloha from University of Hawai'i President Dobbelle, University of Hawai'i at Manoa Chancellor Englert, and the faculty of the School of Nursing and Dental Hygiene.

I am most honored to be here today on this auspicious occasion of the first graduating class of your baccalaureate nursing program.

And, I would like to join your friends, loved ones, and colleagues in extending to you hearty congratulations.

You are the standard bearers for the ideals of scholarship, leadership, service and fellowship - ideals

to which many students aspire, but few are truly able to achieve as you have.

At this point, let's take a few moments and give those who have supported you through this process - parents, family, significant others, pets, friends and colleagues with a round of applause.

I also would like to acknowledge those who have mentored you through this learning experience. Would the distinguished and dedicated faculty please rise and be recognized with a round of applause.

I want to be sure you understand that you are the brightest and the best in Okinawa in our discipline. By completing your educational program, you are part of an elite subset of the nursing profession. In Hawaii and the United States, only about 33% of registered nurses have bachelors degrees. You have a responsibility as the educated in our society to use your knowledge, to share it, to add to it, and to give back to the community that has made it possible.

Recognize your level of knowledge and never forget the gifts you bring to yourself and to others through being a nurse. You are the nurse of your family, your friends, your community. It's a big responsibility and a great honor, one to carry proudly.

In closing, I'd like to read a short passage entitled "To the nurses of the world" by John Wayne Schlatter published in Chicken Soup for the Nurse's Soul.

And, once again, congratulations. Thank you.

Passage adapted from  
 "To the Nurses of the World" in  
 Chicken Soup for the Nurse's Soul  
 by John Wayne Schlatter -

You champions of encouragement, you are so much more than you know.

You have never let what you could not do, stop you from doing all that you could do.

You are salespeople; your briefcases are filled with a product called hope.

You are explorers, knowing that once you have gone as far as you can see, you will still go farther.

You are singers spreading the melody of consideration.

You are lawyers making a case for life.

You are authors helping others add more pages to their book of memories.

You are comedians dispensing the medicine of laughter.

You are magicians creating real miracles that inspire patients and families.

Like King Arthur and Joan of Arc, you are warriors battling against the villains of negativity.

For no one can practice our profession unless they already possess boundless courage, a brain brimming with wisdom, and a heart filled with love.

You are living proof of the best of human kind. And I welcome you whole heartedly to our proud profession.

世界中のナースへ  
 John Wayne Schlatter

激励のチャンピオンである皆さん、あなた達は自分で思っているよりもずっと偉大なのだ。

あなたは自分が出来ないことがあっても、できる全ての事をするのをやめようとしなさい。

あなたは営業担当者だ、アタッシュケースの中には「希望」という製品が詰まっている。

あなたは探検家だ、遠く水平線まで行ってもその先まで行くだらうと承知している。

あなたは歌手だ、「思いやり」というメロディーを広めようとしている。

あなたは法律家だ、「生命」を弁護している。

あなたは作家だ、人々の「思い出」という本のページを増やす手助けをしている。

あなたはコメディアンだ、「笑い」という薬を配っている。

あなたは手品師だ、患者や家族を意気揚々とさせるような本当の「奇跡」を起こそうとしている。

あなたはアーサー王やジャンヌダルクのような戦士だ、「マイナス思考」という悪者と戦っている。

限りない勇気、知恵にあふれる頭脳、愛で満ち足りた心を持っていなければ誰も私たちの職業を实践することはできないからだ。

皆さんは、最も優秀な人々であると自らを立証しています。よって私は皆さんを心から喜んで私達の誇り高き職業へと迎え入れることにします。

(翻訳：比嘉良充)



EDUCATION FOR  
NURSING LEADERSHIP

看護のリーダーシップと大学教育



Beverly Henry,  
RN, PHN, FAAN, PhD, Hon DSC  
沖縄県立看護大学教授  
イリノイ大学シカゴ校名誉教授

シンポジウム：ナーシングリーダーシップ  
場 所：沖縄県立看護大学  
期 日：平成 14 年 11 月 1 日

リーダーとは、ものごとを起こしていく人のことです。変革は自然に起きるものではなく、強力なリーダーの手にかかっています。生まれながらのリーダーという人も中にはいるものの、たいていの人人はそうではありません。しかし、リーダーシップは身につけることができます。必要とされる新しい変革を実現するためにどのようにリーダーシップを発揮するかについて、教員は看護職者に教えることができます。ヘルスケアは、新たな疾病、病態、技術、法律、研究、基準などにより、絶え間ない変化に直面しています。どのような変化にしる、将来への展望や知性をもった、十分な教育を受けた、知識豊かな看護職者が日本に限らず世界中で必要とされています。つまり、意見を明確に述べることができる人であり、“ものごとを起こす”ことができる人であり、リーダーシップの役割を進ん

で果たし、住民の健康を向上させるのに必要なリスクをいとわない人です。リーダーシップの役割を果たせるよう、看護職者には、協力しながら共同で作業をすすめることを教えなければなりません。また、地域社会のキャパシティ(能力)の構築や、地域の健康開発への住民参加といった面でも教育しなければなりません。

看護リーダーの第一の特性として、健康上の問題とその解決法について知っているということがあげられます。リーダーとして他のどんな特性を備えていたとしても、看護職者は、自分の地域や国でどのような健康上のニーズ・問題があるのかを充分知っておかねばなりません。健康上の問題を解決することが看護の本質といえます。もし健康上の問題や住民の痛みを見失えば、リーダーシップを発揮することはできません。看護職者にリーダーシップを教育するには、健康上のニーズに基づく看護教育アプローチをとる必要があります。すなわち、優れた看護教育はすべて、サービス対象地域における健康上のニーズ・問題に関する最新知識を得るところから始まるべきだということです。この考え方は、ごく当たり前のことだけに見過ごされることがよくあります。大学として政府・自治体に新設課程への支援を要請する際の論点も、修士号や博士号をもつ看護職者がどのように住民の生命を向上させるのか、高い教育を受けた看護労働力によってどのように罹患率や死亡率が下がるのか、ということに関するものでなければなりません。日本において、看護のリーダーシップが必要されているのは、例えば若者の喫煙者を減らすという面です。病院においては、感染管理看護師という役職を増設するため、看護リーダーは統計数値を整理したうえで説得力をもって議論しなければなりません。その他に看護のリーダーシップが必要とされているのは、健康教育により乳がんの罹患率増加とその理由について女性の理解を支援するという面です。さらに、日本は自殺率が最も高い国のひとつであり、自殺数も増加傾向にあります。看護教育では、この痛ましい健康上の問題につ



いて、また、その解決法を探るのに必要となるリーダーシップについて取り上げていかなければなりません。

第二に、日本で展望をもった看護リーダーが必要とされているのは、看護教育を再考、再構築し、地域でのプライマリヘルスケアや在宅ケアに重点をおいた内容にするという面であり、このことは特に精神的疾患の住民に対していえることです。学生は、在宅ケアの基準を設定したり、ヘルスケアの継続性を確保したりすることも学ばなければなりません。この面のリーダーシップのために、すべての看護教育で重要な要素として、職種間の情報の流れ、患者教育、退院計画などがあげられます。看護教育は、将来のリーダーを養成するために、看護現場の5年先を見越していなければなりません。リーダーシップとは、他者に先んじて新しくより良い将来像を構想することなのです。それは、新しく明るい未来を創造しながらも過去を尊ぶことでもあります。

第三に、どの国においても、ヘルスケアの質を改善することについては、まだわかっていないところが多くあります。当面は、質を改善する取り組みにより、ヘルスケアを提供する形が今後ますます変わっていくことでしょう。質改善においてリーダーシップを発揮していくため、看護職者は自分が実施する看護の質のレベルを示せるように教育されなければなりません。将来、間違いなく、各病院・ヘルスセンターの看護部門も質のランクづけがなされ、それが当然公開されるようになるでしょう。組織の透明性や個人の説明責任が、優れたリーダーシップにとって重要な特性であるといえます。一般社会には、医療システムのパフォーマンスについて知る権利があるのです。核となる看護機能の1つとして、医療サービスの効果・アクセス性・質を評価することがあげられます。どの看護職者も、自分が患者や住民の健康を向上させたことをどのように実証すべきか教わらなければなりません。将来の看護リーダーを育成するため、教員は何らかの方法により、質保証の概念をほ

とんどの実習科目や研究科目に取り入れていくようにしなければなりません。

第四に、政策開発においてリーダーシップを発揮できるように看護職者を教育することがあげられます。看護のリーダーシップに求められることは、議員や行政幹部との関わりをもち、例えば、保健医療政策を立案すること、ハイリスク集団を代表して助言をおこなうこと、健康を守り安全を確保するための法律や規制を施行する際にリーダーシップを発揮すること等です。こういった役割を果たすために看護職者は、政策過程や、法の適用と限界について学ばなければなりません。また、将来の問題を予測することについても教わり、医療上の大きな問題が起こる前に、予防的な保健医療政策が立案されるようにしなければなりません。

看護職者は、高い倫理観をもち、勇敢で、油断がなく、勤勉です。だからといってむこうみずではありません。強くありながら思いやりも忘れません。最も優れたリーダーがそうであるように、看護職者は住民のことを気遣うのです。よって、住民の苦しみや健康上のニーズについて、他の職種の人にはほとんどできないような見方ができます。教員の皆さん、教育課程をこのような看護の美徳の上に成り立つ内容にしてください。リーダーシップのために、未来を見据えた意気揚々とした看護職者を育成してください。そしてものごとを一新する機会をつくってください。そのうえで若い看護職者にリーダーシップを発揮する機会を与えてください。

(翻訳 與那嶺敦)





## シリーズ 教育・研究分野の紹介



一期生の卒研究生と卒業式の日に。

## 基礎看護領域

教授 嘉手苺英子

基礎看護領域の科目は、看護学を初めて学ぶ学生が、看護とは何かの概念(看護観)を形成すること、看護観を表現するための技術(看護技術)を身につけることを目標としています。言い換えると、看護者としての‘あたまづくり’と‘技づくり’ということになります。学生達はそれぞれの生活体験を通して描いた看護についてのイメージをもって入学してきます。また、看護技術修得の土台となる体の使い方や日常生活技術にもやはり個人差があり、このような差異を前提に、基礎看護領域の科目は1年次の前期から始まります。専門各領域の教育が、看護について共通の認識や行動を持ち始めた段階から出発するのと、大きく異なるところです。

概念形成を目的とした科目は学び方が観念的になりやすいので、‘あたまづくり’を目指した「看護学原論」では自己の健康観察や健康的な食品の展示・試食など、学生自身が五感を通して学べるような授業展開を工夫しています。‘技づくり’を目的とした「看護方法Ⅰ・Ⅱ」の授業には、＜自己学習－グループ学習－個別指導－自己評価システム＞による教育方法を導入しています。看護技術教育は限られた時間の中で多くの技術項目をこなさなければならない

ことから、教師主導の授業展開で進められることが多く、学生の主体性をいかに引き出すかが教育方法上の課題となっています。前述のシステムは、そのような問いの中で東京女子医大看護短大とそれに引き続く千葉大学看護学部基礎看護学講座での仮説検証的な教育実践の蓄積の中から生み出されました。本学では開学当初からこのシステムを導入し、本学の状況に合わせて改善工夫を重ねています。基礎看護領域の教育および研究の理論的基盤は、ナイチンゲール看護論を継承・発展させた薄井看護論に据えています。‘看護者は対象に専門家としての知的な関心と、心のこもった人間的な関心、技術的な関心を注がなければならない(F. ナイチンゲール)’に示された三重の関心は、その看護実践方法論の骨子です。「基礎看護実習Ⅱ」とそれに続く「看護方法Ⅲ」では理論に基づいた看護を実際の患者を受け持って実践し、その体験を振り返って自分の看護実践の中から実践方法論を再指定する学習をします。看護実践能力の修得だけでなく、実践を客観視し看護の論理を見出す能力が大学での看護教育には求められていると考えるからです。

平成15年度のカリキュラム一部改正に際して、基礎看護領域では通年の「看護学原論」をⅠとⅡに分けて半期ごとの科目にし、Ⅱを4年次後期に開講することしました。これにより、専門各領域の学習を終えた段階で改めて看護とは何かを問い、今後の看護についての展望をもつこととなります。また、4年次に開講している選択科目の「看護方法Ⅳ」では、これまでの看護教育に加え看護管理も取り上げることになり、基礎看護領域に看護の基本と看護を継承・発展させる機能が位置付けられました。教育の土台づくりの段階を過ぎ、今年度からは研究成果を形にしていく取り組みにも力を入れていきたいと教員一同気持ちを新たにしています。



## シリーズ 教育・研究分野の紹介



## 成人保健看護領域

教授 吉川千恵子

成人保健看護領域における教員の研究活動には大きく2つあると考える。1つは学生に対する教育研究と、2つ目は成人保健看護に関わる保健看護上の問題や課題解決に役立つ看護専門職としての研究である。本学がスタートしてまずしなければならない研究として、教育研究に重点をおいて全教員が関わってきた教育研究についてまず述べたい。

成人保健看護領域では、複雑な保健医療サービスにおいて対象となる成人期の人々の特性を理解し、様々な健康段階、すなわち健康増進、疾病予防、疾病の急性期、回復期、慢性期、終末期を踏まえ、精神的、身体的社会的、霊的な側面から、問題や課題の解決に取り組み、看護実践する知識・技術・態度の修得を目標に授業科目を構成している。本学の完成年度である去る3月には、成人保健看護領域の全科目の授業内容の枠組みを大項目、中項目、学習内容、授業方法の観点から構成し、これまでの授業で扱ってきた教材、資料、授業方法を体系化した。講義・演習・実習を全教員が一丸となって実施してきた成果を、一つの節目としてまとめておきたかったからである。さらに、大きな理由はこれまで成人保健看護

の教授として教育に責任を持って貢献してこられた伊藤幸子教授の定年退職に向けて教育研究としてまとめる意義もあり、本学紀要第4号に掲載した。

やっと成人保健看護の科目の講義・演習・実習が軌道にのり、教員が同じ目線で全体像が見えてきたことに鑑み、成人保健看護における研究活動も教員の専門性を活かして社会に役立つ研究を行なう必要性を教員間で共通認識している。しかし、これまでも教員が研究チームをつくり、看護現場のナースと共同で次のアクションリサーチを行なってきた。その例をあげると呼吸障害を有する慢性呼吸器疾患患者の在宅療養に関する研究、院内感染症予防に関する研究、終末期ケアに関する研究、そしてテレナーシング技術開発に関する研究などである。

特にテレナーシング技術開発に関する研究は、本県の島嶼性に鑑み従来型の看護活動には限界があり、それを補完する一つの看護技法として有用であることが諸外国の文献をとおしてわかってきた。テレナーシングは外来看護や在宅看護の分野で患者・家族のケアに応用され入院や在院日数を減少させタイムリーな援助ができるなど海外では効果をあげている。しかし、日本においては開発途上にある。本学の成人保健看護においては、現在離島久米島をモデルに電話回線を利用したテレナーシング技術開発に関する研究を行なう一方、糖尿病患者のセルフケアへの支援を沖縄県立看護大学成人保健看護領域と久米島公立病院看護師・医師、久米島町役場保健師・栄養士と共同研究を行なっている。成人保健看護の教員が看護現場の看護職をはじめ、保健医療関係者と共に研究することは百聞は一見にしかずで患者・家族のニーズが新鮮に伝わってくる。そこで、現場の看護職者と問題解決をともに考える研究活動進行中である。



## シリーズ 教育・研究分野の紹介



## 専門支持科目 保健社会学

助教授 岡村 純

本学においては、保健看護の各専門領域をより広い視野から理解を広げ、深めるために専門支持科目を開講している。この専門支持科目の一翼を担うのが、個人の生活を取り巻く社会環境を理解するための保健社会学系である。保健社会学系は、本学の場合、家族社会学、社会福祉論、保健社会・心理技法Ⅰ・Ⅱ、医事法学から構成されている。筆者の担当するのは2年次の後期に開講する保健社会・心理技法Ⅱである。

保健社会・心理技法とは一般には耳慣れない表現ではないかと思われるが、筆者が数十年前に学生・院生として在籍した某国立大学の保健学科（現在は健康科学・看護学科に改組）で使われていた懐かしい言葉である（裏を話せば、この演習のグループワークを担当する予定の教員（後に卒論・大学院の指導教官）が留学したために、他の教室から応援に入って

筆者のグループを担当してもらったのが助手時代の上田学長という因縁である）。

保健社会・心理技法Ⅱでは、人間社会に発生する健康問題に個人の視点だけでなく、集団や社会の側からアプローチする保健社会学の基礎的方法と技法を学習し、卒業論文作成時（4年次）に指導教員の指導を受けながら社会調査ができる能力の形成を到達目標としている。2年次の後期の段階では、人体の構造や機能の学習ともあいまって個人への関心が強いので、集団や社会に目を広げるために、「自分たちのことをもっと知ろう」というモットーで演習を運営している。

演習は、グループダイナミックスが最も機能するといわれる5～7人のグループで行ない、①自分達でテーマを決め、②文献検索をし、③作業仮説を立て、④質問紙を作成し、⑤対象者をサンプリングし、⑥面接調査または配票調査を実施、⑦データ入力、集計、分析をし、⑧報告書をまとめる、という過程を体験し、理解するPBL (Problem Based Learning) を試みている。

保健社会学のなかでも、筆者の専門としてきた領域は農村医学、とくに農業従事者の健康を対象とする農業医学との境界領域であったが、健康事象そのものを対象とするよりも健康の基盤でもあり、健康に影響を与えている生活を様々な角度から研究することが多かった。幸運にも、このことがトピックの生活習慣病の予防において役立ち、単に生活習慣というだけでなく、生活を構造的に把握でき、学生の卒論のテーマともリンクしている。

現在、保健社会学的方法論として、看護領域における質的研究の方法論に取り組んでおり、看護実践の現場での看護職ひとり一人の取り組みを研究成果としてまとめあげる方法論を模索している。できるだけ早い時期に現場で働く卒業生にプレゼントできればと考えている。



# 教員紹介

(よこがお)



講師 D.Craig Willcox

I was born in Vancouver, Canada but moved inland to Calgary where I spent my youth surrounded by prairie wheat-fields to the East and the towering snow-capped Rocky Mountains to the West. Winters were spent outdoors playing ice hockey where temperatures sometimes dropped to 40 degrees below zero! At university I studied medical anthropology and community health. During graduate school I began work as research assistant on a joint research project between University of Toronto and University of the Ryukyus on nutritional and other lifestyle factors associated with exceptional longevity. I first came to Okinawa as a summer research student on this project in 1994 with a small grant from the Medical Research Council of Canada and that's when I first joined the Okinawa Centenarian Study research team.

In 1996, in order to continue my doctoral studies, I returned to Okinawa as a Monbusho scholar where I was based in the School of Health Sciences at University of the Ryukyus. In 1999, while in the process of completing my doctorate I was

recruited as full-time lecturer for Okinawa Prefectural College of Nursing. The prefecture explained to me that they needed a scholar who was a native speaker of English, had Japanese language skills, and had the ability to teach health science related English to nursing students--I seemed to be the perfect candidate!

In 2001, I finally submitted my doctoral dissertation to University of Toronto, and along with my twin brother, Bradley, and Dr. Makoto Suzuki, published a book about my experiences studying centenarians in Okinawa as well as a few findings from the study and how they could be used to improve the health of people anywhere. Called "The Okinawa Program" it was also published in Canada, Holland, New Zealand, Korea, China, Brazil, and Turkey and soon, Japan as well. In appreciation of our research efforts on behalf of Okinawa prefecture Governor Inamine personally thanked me in a meeting last year. It felt good to be finally giving something back to Okinawa after all I had received and I plan to continue my efforts on behalf of the prefecture and this college for many years to come!

Which brings me to my final point, that is, I cannot over-emphasize the importance of learning English in an increasingly international world. Without English language skills as a means to communicate cross-culturally one cannot hope to play a role in today's international society. I do encourage both students and faculty to develop their English skills and offer my help in any way I can to help to facilitate this process. As a native speaker of English with a background in health sciences I am in a unique position to contribute to our efforts at internationalization, education and research at this college. Please feel free to drop by my office at any time!



## 「平成14年度連続公開講座について」

研究・研修委員会委員 宮城 政也

今回が2回目となる本学の平成14年度連続公開講座が、「沖縄諸島における生活と健康」をテーマに、平成14年9月～平成15年2月までの全6回にわたって行われた。今回の講座は、沖縄の離島に関することを中心とするそれぞれの専門領域からのアプローチを足がかりに、沖縄県民の生活と健康について考え、昨今の沖縄の健康・長寿問題等について、各講師の専門的立場からの実践報告及び様々な調査データに基づく話題提供が行われた。

第1回目のスタートは、本学の玉城清子講師による「沖縄における妊娠・出産・子育て」について御講義いただいた。沖縄の妊娠・出産・子育てに関する伝統的(歴史的)背景を私たちの実生活の視点からお話いただき、今まで見聞してはいるものの、さらなる学術的な理解ができたことについて意義深い講義であったとの意見が多く見受けられた。第2回目は、當山富士子教授による「沖縄A島村における精神保健相談」をテーマとして、本県の憂慮する問題のひとつとしてのアルコール問題について、A島村における精神保健活動の一環としての、家族会の発足とそれによる島民の現状などの調査報告の中から、改めて離島におけるさまざまなサポートの必要性を痛感するお話をしていただいた。第3回目は吉川千恵子助教授による「生活習慣病の予防」と題してお話いただき、沖縄県の取り組みや多くのデータより先生の個性豊かなわかりやすい説明に、うなずく受講生が多く見られた。さらに第4回目は、金城芳秀助教授と岡村純講師による「粟国・古宇利島における高

齢者の暮らし」についてが開講され、高齢者の生活を見つめるための新しい研究手法(フォトボイス)の視点からの解説を通して、新たな発見とともに受講生を含め私自身興味深く拝聴できた講義であった。そして、講義としてのトリを飾っていただいたのは、山口栄鉄教授による「アジアの中の沖縄—そのメンタリティー—」、これは今回の講座のひとつの目玉とも言えるユニークな内容であった。従来の保健・医療の立場ではなく先生独特の語り口、さしずめ山口Worldとでも言いましょうか、思わず受講生も話に加わる、受講生参加型の講義が展開された。このような多種多様な講義の後、最終回には、公開講座のまとめとしてのパネルディスカッション「沖縄における健康づくりの課題」が行われ、久米島公立病院院長の平良健康先生、中央保健所次長譜久山民子先生による「離島地域からみた健康づくりの課題」「長寿沖縄・これから」についてお話いただき、今の離島を含めた本県の現状、これからどうなる、また今後の看護大学の役割などフロアを含め多くの御意見、御示唆をいただいた。

最後に、企画運営を通して感じたことについて、これまで、大学が行う公開講座は、地域住民へ専門的情報を提供する一方通行的内容であったように思われる。そのことが重要であることももちろん知っているつもりであるが、これからの公開講座は、開かれた大学として地域住民との間にインタラクティブな関係を築くひとつの手段になりうると、あらためて感じたことを記して報告としたい。





大学行事 ①



## 第1回卒業式の報告

—— 助教授 園生 陽子

本学の第1回卒業式が、平成15年3月8日に稲嶺恵一沖縄県知事ほか多くの来賓、家族等、後輩の参列のもとに挙行された。晴れの日を、羽織・袴や着物など思い思いの装いで迎えた71名の卒業生たちは、多少のぎこちなさはあるものの、しっかりとした足取りで壇上にのぼり、卒業証書第1号となった赤嶺武を始め、学長から手渡された卒業証書を一人ひとりが受け取った。学長からは、沖縄県民の大きな期待に応えるとともに、世界に開くグローバルな視点をもって、看護を求める人々のニードに答えるべく、学習を継続してゆくようにとの告示があった。続いて稲嶺知事からは、高度医療、患者の権利意識・倫理が高まる時代に、質の高い看護の提供、豊かな人間性を養うことに向けた努力を求める祝辞とともに、平成16年度の大学院設置に向けた進捗状況が報告された。

また、本学と学術協定を結んでいるハワイ大学看護学部長のバーバラ・クッカー氏は、「学士をもち、学問・リーダーシップなど理想の先頭に立った看護者に」とのお祝いが述べられた。また、「ナースの心のチキンスープ」の一節を紹介し、「限りない勇気・知性あふれた頭脳、愛で満たされた心が、看護の実践に求められている。この誇り高い職業に歓迎する」との言葉があっ

た。さらにハワイ海外研修で訪れたカウアイ・コミュニティーカレッジのベギー・チャ氏からも、4年間の学習を耐え抜いたことへの慰労と、地域のクオリティ・オブ・ライフへの貢献を期待するとの言葉が述べられた。こうした数々の祝辞に対して、卒業生総代の塚本暁子は謝辞で、先輩のいない新設大学での4年間を振り返って、生徒会を始め多くのイベントを仲間とともに考えながら立ち上げ、臨地実習、調査から卒業論文までの忙しい日々を乗り切ってきた。入学式で学長の言葉にあった“4つのH, Head, Hand, Heart, Health”の意味を再認識できた今、看護活動にまい進してゆくと述べ、共に支え合った仲間への感謝で結んだ。会場からの拍手に送られての退場場面や会場の外では、家族や友人から花束を贈られ、記念撮影をして喜びを分かち合う、華やいだ学生たちの姿があった。卒業生からは、本土に就職するが「大きくなって帰ってきて、沖縄の看護に貢献する」、また後輩へは「言われた以上のことをやれ！」など激励のエールがあった。引き続いて風が強い中で開催されたガーデン・パーティでは、同窓会発足式の後、教職員への謝恩の花束贈呈、三線の演奏などにぎわった。卒業式から卒業パーティまで、学生時代を締めくくる一連の行事を運営する学生の中に、その成長を確信できた1日でもあった。







## 大学行事②



## 卒業論文発表会

教授 加藤 尚美

平成14年12月24日午前9時に発表会がスタートである。4年生は出番を待っているのかスーツ姿できらきらしていた。早朝から、平素の学生とは違い、凛々しい学生に接し多くの教員が感激したのは昨日のようである。

第1回生は学生にとっても教員にとっても本学においては、すべてが初めての事であり、卒業論文発表会も初めてのことであり、教員、学生も力が入る重要な行事である。

大学での卒業論文の位置づけは、研究の一連のプロセスをふみ、まとめ、発表をするということで、研究能力の開発である。将来、研究に取り組める素地を作っておくことが重要である。従って研究ができるというレベルの目標を持っているわけではないが、卒業論文を仕上げるまでの学習のプロセスをふむ必要がある。

4月に指導教員を自ら決めて、スタートした研究は、指導教員によっては研究ができるレベルを目指して頑張られる先生方、自分の考える研究レベルに持っていきたい先生方と、様々であり、双方が大変だったと思わずにはいられなかった。

さて、発表会は3会場で行なわれた。発表時の座長は指導の補佐にあたった助手の先生と学

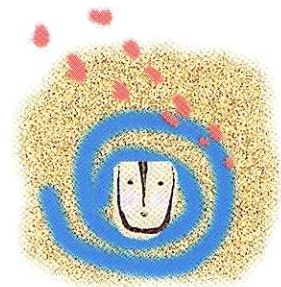
生でペアになり進行をするようにした。これは学生にとっても役割を担いよい経験であったと思われた。発表時間は10分、質疑応答5分、それぞれの学生が、視聴覚を駆使し、堂々たる発表態度で立派であった。発表以外の学生も自分の興味ある研究を聞くためにプログラムを見て、会場を動き学会さながらの状況であった。発表後の質疑応答においても活発に行なわれ、時折強烈な教員からの意見をもらい汗をかき、戸惑っている学生もあり、今後の研究活動にどうそれを活かしてくれるのか楽しみでもある。

卒業論文のテーマは広く、患者様個人を対象としての看護のあり方を検討したもの、高齢者、乳幼児、妊産婦を対象として、実態調査や関わりなどを研究したもの、また、働く者の作業環境を調査したものなど多岐にわたっておこなわれた。ご協力を頂いた多くの皆様に感謝すると同時に、本研究のプロセスを今後の看護活動に活かされる事が重要であると考えます。

学生は本学習を通して研究の困難さと同時に、考える、創造できる楽しさ、喜びを感じたのではないだろうか。

また、卒業論文の発表後、すがすがしい顔をしている学生、何か浮かぬ顔をしている学生様々であるが、研究の過程をふりかえり、卒業後に活かしてもらいたいものである。

本学習は貴重な経験を活かし、それぞれの場で働き、学び続け、大学で学んだ事を基盤にしながらい層精進してほしいものである。







大学行事 ③

退官記念講演会に寄せて

棚原節子先生



棚原節子先生は看護実践者や看護管理者、そして看護教育者として約半世紀に渡り戦後沖縄の看護の節目に立会い、その中で重要な役割を果たしてこられました。講演では先生が特に関心を寄せておられた沖縄の臨床看護の発展過程を、さまざまな具体例を示しながら話されました。その端々から、戦後、若きアメリカの看護の指導者達と沖縄の看護の先駆者達が、質の高い看護の実現を目指してそれぞれの立場で真摯に取り組んでいたことが伝わってきました。

(嘉手刈 英子)

比嘉良充先生



比嘉良充先生の最終講義は、専門の哲学に関する講義を琉球大学の経験からあえて避け、「学問は面白い<知の人生>へどう出発したか」という非常にアトラクティブなテーマで行なわれました。先生の人生の節目節目において、幸運としか言いようのない人との出逢い、そして知的好奇心と前向きな姿勢で常に挑戦していく生き様は、ある意味では一つの哲学史であり、参加者に深い感銘と学問に挑戦する大きな勇気を与えてくれました。

(岡村 純)

仲里幸子先生



仲里教授の演題「戦後半世紀を経た沖縄の看護の出来事」は米軍の施政権下における沖縄の看護発展の特異性を様々なご自身の体験も交えて紹介されました。看護の先進国、米国人看護指導の影響力は大きく、軍政色のない看護ならでわの改革は現在のわが国では実現不可能な出来事・大学教育と看護教育の提携、駐在制度によるプライマリーヘルスケアの普及等再評価となり、本島の看護の礎としての特有な看護歴史を学ぶ機会となりました。

(大嶺 千枝子)





大学行事 ③

退官記念講演会に寄せて

今井昭一先生



先生は既に新潟大学で退官講義を経験されてい  
ましたので、本学でのそれを辞退されました。しかし学  
生有志との依頼に「さよなら講義」(2月21日)をお引き  
受け下さったのです。

「研究と教育に明けくれた半世紀を顧みて」という  
先生から頂いたメッセージは現在進行形で聴衆に届  
く内容をもつものでした。先生は教養を知識にとどめ  
おかず、勇気をもって正論を主張されていましたから、  
その消息を聞く最後の機会となりました。

(宮城 航一)

伊藤幸子先生



「看護教育の過去・現在・未来」について、日本看護協  
会雑誌[看護]第1巻第1号(昭和24年7月)の紹介から  
始まり、大学看護基礎教育の発足(昭和52年)、日本看  
護科学学会発足(昭和56年)、日本看護系大学協議会発  
足(昭和57年)、そして現在、大学院の看護教育、看護の  
専門分化に向けて熱く語られた。東京大学衛生看護科  
をご卒業され、以後日本の看護系大学教育に先駆的に  
取り組んでこられた先生の貴重な講義でございました。

(吉川 千恵子)

かせかけとは、琉球古典舞踊女七踊りの一つです。梶かせとは紡いだ糸を巻く道具で、梶掛  
けとは布を織る糸をこしらえている様子を指しています。この踊りのように丹念に糸を紡ぎ  
布を織って着物に仕立てていく、その一途の心と「技術」・「感性」は、「知識」の継承・創出と  
ともに、本学の看護職者を生み育む教育・研究の原点に相通ずるものであろうと、広報誌の  
名称にしました。



かせと杵



学 生 の 活 動



後輩へのメッセージ

一期生 宜野座 しのぶ

私の人生を振り返ってみるとこんなに濃密な四年間を過ごしたことは、今までありませんでした。

私は、この四年間でたくさん大切なことを学びました。その一つが想像力を働かせるということ



でした。実習においても就職活動においても私は、自分が行う過程を全て具体的にイメージしてから取り組むようにしていました。そうすると、看護技術でも就職の面接でも比較的うまくいきました。

次に、就職活動においては、徹底的に自分自身を見つめ直しました。自分の長所・短所、自分の将来像(自分がどんな人生を歩みたいのか)、どんな看護師になりたいのかなどです。そうすることで、自分がどのような職場で働きたいのか、どういう活動をすればいいのかということが自然に見えてきました。

そして、私が四年間で得た最大のものは多くの友人と先生方との出会いと絆でした。たくさん仲間や先生方に支えられていたからこそ、私は看護師への第一歩を踏み出すことができました。

みなさんも、たくさんの出会いを積極的に求めてください。この四年間での出会いは、よい出会いもそうでない出会いもすべてみなさんの力となり学びになると思います。

最後に、これから、看護・保健・助産師を目指すみなさん、「想いは力になる！」これが私のモットーです。常に自分自身を見つめ、目標に向かってがんばって下さい。



サークル紹介(手話サークル)

代表 橋本 綾乃

はじめまして！私たち手話サークルは、週1回、指文字やあいさつを始めとし、他にも、病院など医療の現場で必要とされる手話を習っています。現在、私たちに手話を教えてくださる知念先生は、県内の他大学・専門学校で手話の先生として働かれ、多くの場で活躍されている方です。毎回、手話だけでなく、これまでの先生の経験なども交えながら、楽しく学んでいます。

私たち医療従事者を目指すものにとって、人とのコミュニケーションはとても重要なものだと思います。様々な人・患者さんに対応できることが、求められるのではないのでしょうか？そこで私たちは、大学卒業までに1つでも多くの手話を身につけ、「私は手話ができます」と言えるくらいになることを目標として頑張っているところです。(実際、少しでも手話ができる人がいると、患者さんも安心されるそうです)しかし、実習や長期休暇で活動が減り、習っても使う機会がなく忘れてしまったりと、なかなか進んでいないのが現状です。

4月から、気分を新たに活動を再開する予定なので、興味がある方はぜひ参加してみてください！(学生・職員を問いません)





教職員の様子

(平成13年度～15年度)

●平成13年度

◎定年退職 参事監兼事務局長 主幹兼学生係長  
松本 淳 比嘉 恵子

◎退職 講師 講師 助手  
天野 洋子 塚本 恵 神里 千鶴子

●平成14年度

◎就任 助教授 助手 助手 助手  
石橋 朝紀子 西平 綾子 宮城 裕子 呉地 祥友里  
助手 助手  
山口 智美 山城 五月

◎定年退職 附属図書館長兼教授 学生部長兼教授 教授 教授  
仲里 幸子 比嘉 良充 今井 昭一 伊藤 幸子  
助教授  
棚原 節子

◎退職 助手 助手 助手  
ミヤジマ 厚子 山城 桂 与那嶺 尚子

◎転入 事務局長 学務課長 主幹兼学務係長 主査  
屋良 善康 中村 新二 松島 良子 具志堅 道子  
主任 主任 主任 主事  
津波古 優子 外間 喜哉 渡嘉敷 真澄 沖 忠人  
主事  
當山 由香子

◎転出 学生課長 主査 主任 主事  
西 昇 徳嶺 祥子 玉那覇 リヨ子 金城 江利子  
主事  
當真 元毅

●平成15年度

◎就任 学生部長兼教授 教務部長兼教授 附属図書館長兼教授 教授  
加藤 尚美 當山 富士子 山口 栄鉄 吉川 千恵子  
教授 助教授 助教授 助教授  
新城 正紀 石川 りみ子 大湾 明美 玉城 清子  
助教授 講師 講師 講師  
岡村 純 仲宗根 洋子 佐久川 政吉 赤嶺 伊都子  
助手  
吉田 真美

◎転入 総務課長 主幹 主査  
安里 健 盛島 明哲 山城 正

◎転出 総務課長 主査 主任  
中村 正賢 新垣 かおる 渡嘉敷 真澄

編集後記

本学は1回生の卒業をもって、一つの節目を迎えました。開学以来、ご尽力頂いた教職員の方々、本当にお疲れ様でした。また本号の執筆者には何かと忙しい時期にご投稿頂き、心から感謝申し上げます。新たな出発に向けて、激励・声援となった「かせかけ」を編集員一同、自信を持ってお届け致します。

広報・情報委員会

沖縄県立看護大学

〒902-0076

沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号

TEL(098)833-8800(代表) FAX(098)833-5133

http://www.okinawa-nurs.ac.jp